2005年度海外研修生等助成事業 研修報告

海外の健康教育から日本の健康教育を考える

沼津市立門池中学校　養護教諭　中村 富美子

「Yoga teacher？」（ヨガの先生？）私は海外の健康教育を学ぶべく、スクールナース学会（スコットランド）に参加した。海外では「養護」よりも「ヨガ」の方が有名であったために間違えられた。

私は「養護教諭」を説明し、説明することで逆に日本の健康教育が海外とどう違うのかが理解できた。養護教諭の英語名は「Yogo teacher」である。「School nurse」と訳すと学校で働く看護師という意味になり、「School nurse teacher」では、看護学校の先生となり意味合いが異なる。言葉がないということは、養護教諭という職種自体が他の国に無いということである。海外のスクールナースは数校を掛け持って週１～２回の勤務が普通である。スクールナース達は、子どもの健康問題を把握しても非常勤のため、日常的に支援することに手をこまねくと言う。「うらやましい、私達も毎日子どものそばで仕事がしたい」、「日本の養護教諭は１校に１人以上いる常勤職だから、単に病気の発見、治療だけでなく一人一人の健康を高める活動を教育の現場で行っている」、「養護教諭の活動こそスクールナースの進むべき道」と言われ大変うれしく思った。

今回、海外から日本の健康問題を眺めてみると、経済分野のように先進国とは言い難い部分もあった。日本では、性感染症や10代の中絶の増加、キレやすい子ども、いじめ、いじめられなど心の問題も増加している。制度の中で養護教諭は、看護職・医療職ではなく教育職として、教育の現場にいる（子どものすぐそばにいる）ということに大きな意味があることがわかった。

海外の健康教育～スクールナースと交流～

しかし、すぐそばにいてもその成果が上がっていない状況もある。健康教育で日本の先を行く国では、様々な問題に先手を打っている。例えば、性教育では、カナダで行われているピアカウンセリング。ピアとは仲間という意味であり、同世代の子どもたち同士で学びあう方法である。性の知識を教師から子どもへ一方向に伝達するのではなく同世代で双方向に行う形だ。そういったやり方を学校現場に取り入れ、子どもの未来を明るいものにしていくよう努力していきたい。